

1916年 (大正5年) [12歳]

「辰雄日誌1916」No. 4 (1)

— 1916年11月20日～12月31日 —

小池辰雄

高等師範(現筑波大学) 附属中学校 1年

○1916年11月20日 (月)

晴天。此の頃、旅行記で学校に残って地理、歴史などの事を筆記する。今日も遅く帰った。

○1916年11月21日 (火)

晴天(快晴)。博物の答案が返って来た。今日は蟬をやった。旅行記は、紀行と地理半分だけ清書してある。英語の臨時試験は随分失敗した。

○1916年11月22日 (水)

晴天(快晴)。飯能遠足。四方の空、何れを見ても一点の雲だに掛かっていない。うらかな天候であつた。6時35分に家を出発した。電車に乗って大塚の終点に着いた。山手線の停車場大塚にはかなり多くの友達が来て居られた。7時50分に池袋駅を出発した。

汽車は忽ちに停車場付近をかけはなれて、田畠の間を進行する。有名なる所沢も途に在ったが、飛行機が飛んでいなく静かであつた。秩父の山々、富士等、車の窓からながめながら、次第に山に近接して行く。目指す飯能駅に到着した。市街を縦貫して高麗峠に指し向かった。緩なる坂を上って、次に来る急傾斜をなす坂を上った。それより暫く林の中を過ぎて、高麗峠の中間に来る。眼下に眺められる所、横谷をなしている。眼の前にひろげられた景色、気をうばう。次に高麗峠を下って谷に下りて、高麗川を渡って高麗神社に行く。樓門をくぐって、石段を下って先ず神社参拝する。そこで静かな涼しい風を受けて、昼食にかかった。

午後より天覧山に向かった。再び高麗川を渡る。川の水澄んで静かに音もたてない。所々、青く淀んで鮎も住んで居そうであつた。(乙の)菊池君、上村君等と話しながら足を進める。頗る緩やかな坂を知らず知らずに上っていたのであつた。次第に追い越される様子である。愉快に話をしながら天覧山に、疲れをわすれて着く。しかしその頃は、大勢来て居られて、茶をくみかわし早、林檎の皮をむき、菓子などを口にしてゐる。

絶頂に達すると先ず一望する。目ざめるばかりである。明治天皇行幸記念碑がたてられてあつた。

四方豁然とうちはれて、武蔵野の原一目瞭望とひろげられ、飯能の家一目に見下ろされる。入間川、紺碧の色をたたえてゆるやかに市街の北に流れている。あだかも絵に書いた様で



ある。衆山屏風の様に立ち並ぶ。中には名山も聳え、ゆかしい眺望である。殊に富士その中より高く空に聳えて白き綿を戴いていた。左方に渺茫たる原の中に筑波山一山孤独している。時の過ぐに随い一同天覧山を下った。

3時すこし過ぎ、乗車した。帰りの富士は紫の色に化していた。一条の雲をうなじに巻いて、寒気に見える。池袋へ着いた時は全く日は暮れはてていた。驢やがて帰宅する。

今日は姉〔小池富士子 1899/11/22 生〕の誕生日で賑やかであった。

○1916年11月23日 (木)

晴天。にいなめさい新嘗祭〔天皇がその年に収穫された新穀などを天神地祇てんじんちぎに供えて感謝の奉告を行い、これらの供え物を神からの賜りものとして自らも食する儀式〕。天気は非常によかったが、旅行記で外出するを得なかった。兄が帰つて来られた。しかし旅行記は書き終えることはできなかった。

○1916年11月24日 (金)

晴天。金曜日来て見れば、旅行記を持って来られたのは8人程であった。僕は26日に出す計画である。〔飯能遠足記念として、紅葉の押し葉の貼付あり〕

(止むを得ずこうなった計画ならむ)〔短評〕

○1916年11月25日 (土)

この頃、僕は風邪を引いて休んだ(鼻水が出る)。

○1916年11月26日 (日)

雨天。明日の天気と変わって、よくなかった。北風が吹いて寒かった。今日、旅行記が出来上がった時、実に愉快的気持がした〔「修学旅行記、1年乙組辰雄」と表紙に記された冊子のスケッチあり〕。

(苦労の後の愉快はまた格別でしょう)〔短評〕

○1916年11月27日 (月)

晴天、温暖。南風が吹いて、朝、学校へ行く時から晩寝るまで絶えず蒸し暑く感じた。剣道をやった時は非常に暑く、汗が非常に出て、体が熱くなった。道場を出る時、暖かい風もその時は涼しく思われた。

○1916年11月28日 (火)

剣道は成績仕合があった。此の頃一たいに段々寒くなつて来た。実に今や冬の上旬を過



ぎなんとしてゐる。楽しき正月も30昼夜の中に到来するのである。

(多忙なりし数日、日記もやや簡単になりし様なれど、またそのうちに振うなるべし)〔短評〕

○1916年11月29日(水)

雨天、北風強く寒し。今日の天候甚だ悪く風雨降りつづく。学校は勿論雨天例の札は掲げられてあつた。乙級的首藤君、大竹君、大塚君、中島君、菊池君、納富君、上村君、宮脇君、吉松君、白石君、堀君、澤君等と鬼ごっこをする。第一運動場、第二運動場へ逃げたら、鬼という規則をたてて行つた〔第一運動場、傘置場、第一校舎、便所、第二運動場の配置図あり〕。上級生全部、大勢遊んでゐる中であるから、非常に面白かつた。帰る時にもまだ引き続いて降つてゐた。道が非常にぬかつてゐた。ストーブは未だ石炭がたかれてゐなかつた。僕は今年なるべく外套を着ない積もりである。

○1916年11月30日(木)

雨天。昨日の雨は、猶も引き続いて地を打つ。土の窪んだ所に水がたまつてゐる。とよの水は絶えず流れてゐた。朝すこし用意を遅らして、家を8時に出た。電車通りを歩くとき、前後を見ただけでも我が学校の帽子が見えない。停留場の時計を再び見れば、8時を1分過ぎてゐた。僕はこれは大変と、雨の降る悪い道にさからう風を押し分けてスピードを出した。清水谷をすこし過ぎた時、早足に変じて車庫前のそばまで行つて、それから再びすこし駆けた。車庫前の時計を見たら、8時7分になつてゐた。すこしは進んでゐるのでもあろう。しかし僕はフルスピードを掛けて傘をすぼめて、校内へかけ付けた。事に2鈴も今や鳴り終らんとする所であつた。大急ぎで列中に這入る。靴をはく中に号令がかかつた。今日も相変わらず昨日の如く遊びをした。今、地理は奥羽地方をやつてゐる。今日は2県進んだ。昨日は国語の試験である。

夜、外を見ると雨はやんで、まるで別の星が輝々と輝いてゐる。

○1916年12月1日(金)

晴天。今日は図書はなかつた。第1時間は作文をなおすことをやつた(飯能紀行)。第2時間目にはその清書をして出した。ストーブは赤くなつてゐる(火の入ったダルマストーブのスケッチあり)。英語の時間に1ヶ年の月12を英語で書いて清書をした。剣道は試験の如き事をやつた。先生は点をつけてゐられた。作文の時間に国語の試験をやる。唱歌は試験であつた。今日、学校からかえる途中でLaurel Reader「ローレルリーダー」を買うことをわすれた(もつともお金をもつてゐなかつた)。夜は月や星が高い空に出てゐた。上弦の月。



○1916年12月2日 (土)

曇天。今日はLaurel Readerを買いに行つたが、月曜の午後から来るので今は一冊もないというので、7時半頃、家を出て電車に駿河台下まで乗って、そこで下りて三省堂、東京堂、勉強堂、中西等の店を見廻つて聞いたが、何処にも無かつた。それから僕はその辺の本屋によって聞いたが矢張無かつた。それより神保町に向かつた。両側にありとあらゆる本屋に入つて聞いたが無かつた。殆ど失望して神保町のすこし三崎町の方に行つた所に2軒本屋が並んでいる所の初めの本屋によつた。その時、念入りに探した甲斐が報いたのか2冊Laurel ReaderのIがあつた。先を見れば本屋は全く尽きている(所々に小さい店もあつたが)。歡喜に満ちて道を急いだ。外套を着ていなかったが寒くはなかつた。星は唯一つ、金星と思われるもの一つ、頭の上に輝いて、朧月で時々雲にかかる。水道橋に出で、春日町の坂を上り、伝通院の前を通つて家に着いた。9時であつた。駿河台下から随分あつた様な気がした。しかし時間は案外に早かつた。湯に入り床を敷いてねた。「この日歩いた経路図(水道橋―三崎町―神保町―駿河台下)と神保町にある本屋(三省堂、東京堂、勉強堂、中西)の地図あり」

○1916年12月3日 (日)

雨天。朝、起きて見ると、霧かと思われる雨が降つて居た。今日は、晴れていたら午後から友達と出かける筈であつた。一日雨が降つて余り面白くなかつた。

○1916年12月4日 (月)

曇天、夜雨。今日、北川先生は出席なされた。すこし変な気がした。今日は朝から霧の様な雨が降つたりやんだりして、空は白くなんだか気持ちのよくない天気であつた。

思えば、コレラ病の事は、知らず知らず遠ざかつて、今は魚も食している。今日の夕飯にも上つた。夜、博物の帳面をだした時、蝶の翅^{はね}があつたので、虫眼鏡で鱗粉を見たが、顕微鏡で見た時よりも小さく、黒い色の所は黒く実物よりも少し大きく見えただけであつた。なお、学校の運動場で6年の時教授した(地、歴)教生の先生にあつた。

(12月5日閏。いよいよ学期末になりました。からだをいたためぬようにそろそろ勉強なさ

い) [短評]

○1916年12月5日 (火)

晴天。歴史1時間は幻灯を映した。1時間もちどころに過ぎた様に思われた。黒い幕を開いた時のまぶしさ、明るさ。朝起きた時、日光で室の中が明るくなっているときの様であつた。定期試験も近くなるので、準備も始めている。また近々の中に冬休が来る。

夜は星や月また白雲など暗い闇にでて、四囲が光っていた。木なども屋根に陰を映す(星空、



白雲、木、屋根のスケッチあり。夜、従兄の光久さん〔太田久光、次女太田みねの次男〕が松本50連隊からかえつて来られた。ついこの間まで1年志願兵で居られた。その時のお話等すこしはうかがったが、勉強があるので二階に上った。夜、泊まって行かれた。8日に熊本
の三池炭坑に御務めに行かれる。

○1916年12月6日 (水)

午前快晴、午後雲出づ。今日の文法の所はつきりしなかった。普通体操の時間、宮下先生が休まれて国語をやった。その時間の後の方で甲乙にわけて書取をしたが、第一番に「早魃」と先生が読まれた時、僕は一時の元気にまかせて手をあげた。先生は御指しになった。僕は黒板に出て思うと、「魃」という字に怪しい所がでて来た。初めに「早■」と書いてなんだか変なので、次に「早▲」と書いた。甲の堀君は最早、席に帰った。よいと思つて席に着いた。此処に醜態を行い乙の恥辱たらん失敗をした。見事、復讐をさられた。甲は全く違いなくあつた。乙には二つの欠点があつた。

宮下君が多く休んでいる。肋膜炎そうである。和田君の頭はどうなのであろうか、出席されない。

(あまりよくなくて困りました)〔短評〕

牧野君は胃がわるいそうである。大橋図書館へ行った時、家へ夕飯を食べに行つて来ると行つて、余程あとから家に夕飯をたべに行つた。堀君よりもあとから来た。大食家と見える。鈴木君の手はなおつたそうである。10時半ごろねた。

(之は大食家の証明にはならぬ。しかし実際は大食家であるようだ)〔短評〕

○1916年12月7日 (木)

曇天。朝1分でも後れたら遅刻をする所であつた。3時頃まで遊んで、家に帰った。今日で東西遊記抄の準備はまず終つた。11時消灯。

(あまりに簡単であるので尚書き加える)。

地理は今日、2県半進んで奥羽地方を全部終えた。奥羽地方に愈々入るのかと思つた。ついこの間も打ち過ぎて終つてしまった。非常にかけはなれたことではあるけれども、仙人掌さばてんには冬になって未だ嘗て水をやったことがないが、気がついて見ると、まだ元気で枯れる色を見せない。高山植物は大方枯れて頗る貧弱になった。しかし宮城県から苦勞をして丹精して養つた、そのおもかげは未だ残っている。

(仙人掌には水は禁物ではないか)〔短評〕

○1916年12月8日 (金)

雨天。1時間目に英語がある。剣道は試験であつた。その試験は普通の課目の試験と同じく、



紙に答案をかくことである。問題が3題でた。作文の時間には「一年間の思出」という題が出た。初め筆が動きにくかったが、考えつくとき書くべきこと勃々と出て来た。実に1時間には書きつくせなく、おいしい様な気がする(1時間で書くとしては)。11時消灯。

○1916年12月9日(土)

曇天。Laurel Readerの進むこと面白く愉快である。僅かの中に早124頁の中の52頁を過ぎた。博物は今、鰻^{エビ}を教わっているが、今も鰻の生きているのを観察した。それを今日は足を採り離したり、膜を鋏^{はさみ}で切ったりした。聊^{いささ}か愛情を与えるしだいである。僕の鰻はなおも息をついて時々跳ねるので却って可哀そうであった。

(追善供養をせねばなるまい)〔短評〕

今、家に着いた時は12時15分であった。常に学校から帰ると、すぐにお菓子を食べる習慣が着いているのでつい誤りそうになった。今日は主に歴史の準備をした。消灯10時。

○1916年12月10日(日)

午前曇天、午後より雨天(雪の如きもの降る)。午後一時、雪と雨との混合したものが降った。夜は厳しく降っていた。

(之を称して霰^{みぞれ}という)〔短評〕

歴史の試験は如何なることができるであろうか。楽しみであるし、心配である。

○1916年12月11日(月)

雨天後曇天。歴史の問題の1番は初めての留学生とその結果。2番は入鹿^{そがのいるか}(蘇我入鹿)の暴横。3番は軍備について記せ。大宝令の時に定まった兵制のことである。この3題が問題であった。剣道は時間の終りに進級式を行った。その時、伊勢先生から皇太子殿下のお話がであった(現在の殿下)。長く留まっていた。国語課題は今日返された。それを見ると夏休のことを思い出す。10時消灯。

(よろしい)〔短評〕

○1916年12月12日(火)

8時頃まで濃霧、霞。後一時晴天、正午頃より曇天となる。後時々雨降る。月夜。起きて縁側に出て見た時、余りの濃霧に驚いた。僕には初めての様に思われた(東京に於て)。電車通りを歩く時も、10間程先から段々霞んで20間程離れた電車は見えない眼界はせばめられて変な気がした。太陽は太陽と見え、月の様でそれを仰ぎ見ることができた〔霧の中の太陽、電柱等のスケッチあり〕。

学校の第一運動場に霧が非常に立ちこめて、本校の校舎が殆ど全く見えなかった。その



霧は大きな一つの群の様に見えて、時々風のために動揺している。

〔……英文省略……〕

歴史の時間には幻灯をした。次の遊び時間こそ愉快であった。剣道の時間に仕合をしたが、僕は河合君と上村君との仕合に勝利を得て、次の広瀬君に勝をうばわれた。夜すこし腹をいためたが、すぐに直りそうに思われる。月夜であった。消灯11時17分前。

○1916年12月13日 (水)

晴天。文法の試験は余りよくなかった。今日は他に記事なし。

○1916年12月14日 (木)

晴天。今日は地理の最後の時間であった。奥羽地方を全部終えた。何だか質問があるような気がする。習字は試験であった。試験が近づいて来た。それに随って冬休みも近くなつて来た。

○1916年12月15日 (金) ～17日 (日)

略す。Sinsonの飛行を家へ3、4度見た。何れも天候は晴及び曇のどれかであった。

〔註：キャサリン・ステインソン (Katherine Sinson 1891～1977) はアメリカ合衆国のパイロット、建築家。宙返り飛行を行なった最初の女性パイロットである。1916年12月15日、青山錬兵場で夜間飛行、16日に宙返り飛行を披露した。〕

○1916年12月18日 (月)

英語、地理試験、各2時間宛。

○1916年12月19日 (火)

修身、博物試験、各2時間宛。

○1916年12月20日 (水)

晴天。数学、国語試験、各2時間宛。国語の答案を出した時、急に頭が軽くなった様な気がして、また今まで覚えていたことをすっかりわすれた様な気がした。帰りに小学の学芸会をすこし見てかえった。家へついて、昼食をすまして武田君の家へ行った。居たので二人で試験の後であるので愉快に知らずまかせて時を移した。その中に夕飯が出た。戴いてなお遊びをつづける程に10時半になった。遅くなったので面白い遊びも留めて家へ向かった。その時は人通りが殆ど絶えて、電車は益々早くレールを滑る。寒く吹く風に外套も足袋もつけていなかった。足の指の冷たさ、水の如く終にはその冷たさも感じなくなった。



手は振っている為か益々暖かくなって来た。同心町あたりからは猶、人の往還絶えて家のそばへ来たことは全く僕一人に、空の電車が通るばかりであった。家の戸は閉められて居った。女中一人で後は皆寝しずまっている様子。炬燵へあたった時、初めて足の冷たさを感じた。眠る頃は11時を過ぎ、家内は静かに外からは寒さを加えられる如くに思われた。

○1916年12月21日 (木)

晴天。今日から冬休みとなった。午前9時半頃、青木君と武田君が遊びに来た(昨日約束をした)。すぐに三人で毬投げを11時までやった。それから家へ這入って、欧州戦争競技の駒で人倒しをした。午後からもつづけて色々なことをして、夜にはトランプや歌留多をした。8時半頃、皆はかえった。僕はそれから本や新聞で読みつけている、義民嘉助「東京朝日新聞の連載小説」を読んでねた。

兄は今日、帰って来られた(1ヶ月程前から外へ行っていた)。

○1916年12月22日 (金)

晴天。午前7時起床。8時より9時にかけて斬髪した。頭が軽くなった様な気がした。9時15分に家を出た。青木君の家まで40分かかった。着いて二階で二人でテニスをやった。1時間位した。実に愉快に興味を感じた。午後1時頃から二人であまりしばらく動物園に行かないので行った。中で上級生に会った。僕は動物に獲物をやるのが面白いので大方でやって見た。以前に来た時と少しも変わりがなかった。3時半頃出た。家へ着いたのが4時であった。そこで青木君の弟と独楽を廻したり本を読んだりした。夜は賑やかに8時まで遊んだ。皆、試験がすんだので面白く遊べた。

前の大通りには電車を延長するのであろう。柱が所々に建てられてあった。白上に接近した所は夜店や活動写真で賑やかであった。8時半、家に着いた。姉の方は今日で学校が終った。

○1916年12月23日 (土)

晴天。7時頃起きた。8時から9時にかけて僕は庭の掃除をした。つまらなくはあったが、命令に依って掃除をした。僕は朝の家は留守番の様で、何だか眠くなる様な気がした。今日は一日家に居たが勉強は殆どしなかった。本を読み続けた。

○1916年12月24日 (日)

晴天。午前、本を読む。午後1時半、お歳暮を持って出掛けた。行く先は親類の青木君の所である。着いた時は2時をすこし過ぎていた。毬投げを先ず第一にした。その次にテニスをやった。色々楽しい遊びの中に時は打ち過ぎて6時となった。聴^{やが}て夕飯をすませて、



電気の下で遊んだ。その中に9時になった。皆に「宿って行きたまえ」と云われるので、僕は母が隣の吉原の叔母の家に行つて居られたが、大丈夫だと云われるので、そのままその夜はそこにねた。(後で母は帰られたが、白山のそばで僕が居ないのに気づいて戻つて来られたそうである。僕は全くよくないことをしたと思つて、後にそのことを話した。)

○1916年12月25日 (月)

午前晴天、午後曇天。7時に起きた。常の如く床を上げ、顔を洗つて炬燵へあたりに行く。朝の挨拶を叔父叔母にする。8時頃、四郎君と一緒に、本郷の美満屋(運動器具の東京)へ毬を買いに行つた。これは叔母の僕にくださった御歳暮である。そこまでは非常にあつた。大通りであるからなお遠く思われた。帰つた時、随分遠くまで歩いて来た様に思われた。「青木・吉原の家―白山・さかな町―高等学校―大学正門―赤門―美満屋―本郷三丁目の道順の図あり」帰宅した時に武田君が来た。そこで毬を皆に分けてくださった。そこで四郎君と宣彦君と泰彦君とでまりで遊んだ。

午後からは三弦さんにつれられて、実さんと僕達全体で6人で出掛けた。巢鴨の染井墓地に行つて僕の家のお墓に参つてくださった。それから、巢鴨の山の手の停車場に向かった。着いた時、丁度着て危ないくらいであつた。乗車すると即ちルールをすべりだした。聴^{やが}て大塚、池袋、目白を通過して高田馬場に着いた。下りてから戸山ヶ原を指して行つた。間もなく到着した。時に2時であつた。よい場所を見付けると、即ち毬を取り出して毬投げをした。面白くほうる中に疲れてきた。そこで蜜柑を食べた。子供が多数で風を上げていた。しばらくして再びして外へ移転した。いたずらな子供6人で草や枯葉を焼いていた。騎兵が習練しているのも見た。時は次へ次へと過ぎて4時になった。なお遊びたくはあつたけれども、時間が許さないの、とぼとぼと道を歩いて高田馬場の駅に着いた。日が短いので益々暗くなった。武田君と僕は大塚で下車した。僕は昨日宿る積もりでなかつたので、財布をもつて来なかつたので切符を借りました。電車の中で小学校の岸川先生に会つた。

家に着くと、太田の滋雄さん(大田家次女(みね)の長男)がきて居られた。兄等と夜、トランプ等をして過ごした。滋雄さんは今日宿つて行かれた。今年の記念の日である。10時に床に着いた。

○1916年12月26日 (火)

晴天。今日は親類の友達が来て、午後1時から始まる送年会に行くことが出来なくなつた。残念なことであつた。朝、二階を掃除したが、縁側等ふくとき、割合に水が冷たかつた。

○1916年12月27日 (水)

曇天、夜から風が吹きだした。朝、手洗鉢の水が氷つて張つていた。午前は勉強した。



午後からは本を読んだり、勉強をしたりした。

○1916年12月28日(木)

青空、風強し。8時半、武田の家へ行った。武田君は起きて顔を洗っている時であった。整ってから青木君の来るのを待ちつつ遊んでいた。聴て来たので三人でトランプでぬきっこをした。それがすむと二階へ上ってテニスをやった。それは午後2時まで間に昼食を挟んでいた。面白いがこの遊びも飽きて、次には世界の奇蹟という本を見た。中に上の様な絵が出ている所があった。これは人の目の不正確が否やを見るための図である。(一)のは中が太くして両端が次第に細くなつて見え、(ホ)は中が細くて両端が太く見える。(イ)(ロ)(ハ)は互いに並行している線であるけれども、かしいで見える。

(実際不思議な印象である)〔短評〕

まだこの外に二つあったが、複雑な図であるので書きません。

それからすぐ青木君は用で家へかえつてしまった。そこで二人でつまらないので、急いでかたづけて下へ行って遊び、次に再び二階へ来て遊んだ。暗くなると再び下へ行った。風が吹くのでかえりたくあった。夕食を食べて行けといわれるので、食べてまた遊んでしまった。9時10分に家を出た。僕は今日すこし多く遊び過ぎたと思った。

門を出るやいなや、猛烈に吹きすさぶ風は走り来つて僕の身を飛ばさんばかりである。夜であるから、ごみは目に見えなかったが、わるい空気を吸いごみが目口などに入ったであろう。外套を着ていなかったたので非常に寒く感じた。通る人はごく稀まれであった。店は早々に閉まっている所もあった。即ち、身の暖味はぬけて益々寒気を感じて来た。手、足、耳の冷たさは氷に勝らんばかりに思われて、触れても感じない位であった。絶えず北風は強く吹いて来る。身の冷たさを忍んでようやく伝通院に出た。こんどは北に向かって進むのであるからたまらない。人は殆ど通らない。電車が時々見える。羽織はからだと直覚に流れて僕の突出した耳には氷でもさわる様に吹かれて、終に感じがなくなつてしまった。目を細くして口をふさいで、体を前にして駆けて家に着いた。炬燵へ20分位入つてようやく暖味を感じた。全くこの夜の寒さは当時を思うばかりで、何とも表しかたがないくらいであった。

○1916年12月29日(金)

晴天、青空、風非常に強く吹く。午前10時に護国寺の方にお歳暮を持つて使いに行った。行ったことのない家なのですこしもわからなかった。一生懸命でさがした。しかし終に見当たらなくて空しくかえった。それは一つは僕が番地を忘れたことと、姉が左側だといったことをまもつて、さがして右を見なかったことである。

午後から、また出かけた。風は相変わらず強く吹いて道をはいていた。こんどは番地を



聞きながら行つた。達した田中という家は図の様にまるで違った方面にあった〔家から―竹早町―清水谷―車庫前―窪町―大塚町―坂―護国寺―学校―川―橋―交番―田中家に至る経路図あり〕。

そこで目的を達して、護国寺目がけて道に沿つて行つた。その時は実に早く出た。図に見る様に一步の所であつた。帰りは風に乗つて歩いた。途中、久保によつて靴を作つてもらつた。

帰つて、『三家庭』という本を読んだ。別に勉強をしなかった。今日も火事が必要であつたであらうと思つてねた。

学級会雑誌来る。兄(中央幼年)がかえつて居られた。

〇1916年12月30日(土)

晴天(快晴)、強風。午前11時に僕は使いに行つた。それもやはり昨日と同じお歳暮である。風も相変わらずであつた。目がわるくなりそうである。家を出て道順は図の如く〔家から―竹早町―八百屋・酒屋―交番―寺―橋―植物園―博文館―交番―聾啞学校―杉浦家までの道順の図あり〕。聾啞学校の前の鳥屋で聞いた。わからなくなつたので。それから進んで、交番で聞いて、杉浦要太郎という家に着いた。受けとつて、僕が受けとるときにお菓子を包んでのせてくださった。

家へかえつて学級会雑誌を読んだ。兄がかえつて来られた。こんどは6時まで軍隊へかえらなければならないそうである。去年は8時までにかえればよいのであつた。

午後からチリ紙5帖、ベルツ水〔化粧水〕、ゴム糊、墨汁、ペン等を買に行つた。途中で雁の非常に多くで群になつて飛んで行くのを見た。

夕飯がすむと兄とトランプのSixty-sixというのをやった。終に僕が先に7点を得た。それがすむと松を買うことを目的としながら、青木の方へ行つた。まず青木の家へ先に寄つて、2時間程遊んだが、また泰彦君の咽の御見舞いをした。その時、実さんが脳がわるくてねておられた。そのそばで皆でお話をした。

9時に暇をして、五明の豊美さんと兄と一緒に出た。かえりに門松を買つた。そのときこういうものは随分、掛値をいうものだなあと思つた。売っていた親爺は面白い。愉快な人であつた。風は十分静まつていたが、寂かに吹く風こそひやりとする。

隙がとれて10時10分に家に着いた。着くと母、兄、姉と僕とでトランプをやつたが、母がトランプをやるなどは非常にちかごろにないめずらしいことであつた。呑気に6回ほどして寝床に着いた。最後のトランプのとき、母はマイナスを全部集めた。そのために僕のとつていたプラスはマイナスに変じて一挙にマイナス20をとつた。母は非常なプラスになった。面白く遊んだ後は気持よくねられた。

12月29日、30日の夕方の景。二階の屋根にて富士山を写生す〔遠く富士山を望む夕焼けの赤



い空のスケッチあり。

(色が少しどうかと思われる)〔短評〕

○1916年12月31日(日)

晴天(快晴)、青空、風名残なく静まる。見れば空ははてない青空を堪えて、若干の薄い雲を浮かべている。昨日の北風はどこへ行ったのであろうか。早、寂かに流れる穏やかな風のみ。先ず僕は日記を記した。それから靴を磨いた。それから郵便を出しに行った。臈て昼が来た。それから長く忘れて夢の中にも見なかった仙人^{さぽてん}掌を植えなおした。昼の御飯は1時半になった。豊美さんが家においでになった。僕は14となった。

それからお菓子を岡埜に買いに行った。帰って来て、姉の靴を磨いて上げた。朝、兄と門松を立てた。夕飯をすませて、トランプをした。僕は勝利を得た。ランゲージリーダー(Language Reader)をやらった。9時半頃、湯に入ってた。

今日等も新聞に品川の大火等、また雪のことなど三面記事の所に色々載せてあった。今日の朝等も水は氷り、庭の土は盛り上がって、踏めばざくざくいう実にめずらしくなった。昨日は霜柱が立っていた。

日常行うこと。起きて先ず、雨戸を開け、床を上げ(これは時々やらないこともあったがこれからはする積もりである)。歯、顔、手などを清めること勿論。時間割をそろえる。時々は朝勉強をやる。学校から帰って来たら、その日の主な課目の復習を欠かさずに行う積もりである。なお予習もしなければならぬ。それを機敏に行うことが大切である。本も読む時間が出来たら読む。夕飯後は1時間休憩する。その間はそのときの都合に依って何かする。また時々靴も磨く。夜は雨戸を閉め、時々床を敷く。しかし床を敷くことは多い。消灯、起床は時間を確定して置く。(学校に出る様になってから記す)

